

日本語教育を活かすためのリソース・リテラシー

李 徳奉

1. はじめに

日本語教育は世界的な規模で見るとまだまだマイナーな言語である。しかしながら、日本語学習者における韓国人学習者の占める割合は多い。韓国の日本語教育の歴史を振り返ると、少なくとも15世紀にさかのぼる。両国の間には一時的に不幸な歴史があったものの、これまでの教育の蓄積を考えると韓国人学習者が多いのは当然の流れだろう。

1998年のキム・デジュン政権の折りに文化開放政策がとられたが、教育はそれよりも先に開かれていた。文献には残されていないものの、戦後1950年代には日本語教育が再開された。また、1961年には韓国外国語大学に日本語学科が、国際大学に日本文学科が設立され、1985年には日本語教育に関わる第7次学習指導要領が制定された(その5年前には内容が決定している)。こうして教育関係者は日本語教育に関わる情報の発信と啓蒙のためにたゆまぬ努力を続けてきた。教育とは決して現代の政策のみで決定するものではない。政策的に一番決定力を持つのは学習指導要領である。日本語教育関係者がやるべきことは何かと問われれば、それは智恵を働かせて政治家たちに学習者を活かすための教育を提言し続けることであろう。

2. リソース・リテラシー

リソースとは「『教材』を超えた意識的、無意識的に教育や学習に用いられることのできる人、もの、場所、こと、メディアなどの学習資源」を指す。教材を超えた教材と言えよう。このリソースを活用する能力をリソース・リテラシーと呼ぶ。リソース・リテラシーの構成要素は次の通りである。

1. リソース活用の学習に対するビリーフス
2. メディアへのアクセス能力
3. 資料の収集と分類能力
4. 資料の運用能力と人的交渉能力
5. リソース活用結果の評価能力
6. リソースを作り交流する能力

3. リソース活用度の低い日本語教育

日本語教育のリソース活用度は決して高いとは言えない。ではなぜリソースの活用度が低いのだろうか。それは学校中心の日本語教育が行われており、学校教育自身が閉ざされた状態にあるからだ。そのため実際のコミュニケーションよりも、試験対策中心で授業が行われることが多い。使える日本語を習得するためには、学校や試験だけに縛られる教育ではいけない。教室という枠を超えてその言語を実際に使用している社会に開かれた学びの場が求められる。

4. リソースに期待する役割

リソースの活用はレベル別の学習効果を生み、自律学習への動機付けを高め、高いレベルの学習を導く。日本語学習者は230万人と言われているが、この半数は初級で学習を断念してしまう。日本語はひらがな・カタカナ・漢字の3種類の文字を使用するため文字学習の負担が大きく、ハードルを乗り越えられない学習者が多くみられる。文字学習をサポートできない限り学習者は初級の先へ行き着くことは難しい。このハードルを乗り越えるためには、自らリソースを活用できるリソース・リテラシーを身につける必要がある。

5. 人的リソースと「交流」の活性化

リソース・リテラシーを身につけるためには人的リソースを活用した交流型日本語教育の実現が望まれる。日本で日本語を学んでいる学習者に日本人との接触場面を尋ねると、その相手は日本語教師やアルバイト先の人々と言った回答が多く、日本にいても人的リソースの活用ができていないことがわかる。人的リソースを活用するためには、日本人と交流できる場を意識的に作る事が大切だ。たとえば、交番をみつけたら、たとえ知った道であっても日本語の練習のために道をたずねてみるなど、ちょっとしたことが学習の機会になりうる。交流は文化という先入観抜きに、人間同士の接触により「個の文化」

の理解への入り口となる。しかし交流による接触は異文化理解の入り口にすぎない。異文化理解のきっかけとしての「交流」をより効果的にするために「交流」の教授法としての位置づけが求められる。

6. リソース活用への道

リソース活性化のために次のことを提言したい。

● リソース活用のシステム構築

カリキュラムや学習指導要領の授業内容にリソースの活用を取り入れ、教授法や教材に取り入れる。

● リソース活用のデータベース構築

情報を国際的ネットワークで共有するためのデータベースを構築する。

● **学習者のリソース活用の行動ネットワーク分析**
学習者のメディア使用状況、IT 活用度、PC 使用時間などを把握し、リソース指導の方向や計画を立てる。

● 教室環境としての授業設備の調査

日本語教室のマルチメディア設備など、使用可能な設備状況に基づいてリソース指導の計画を立てる。

● インターネットの使用状況

若い学習者ほどインターネットの使用を重視しており、そのためのコンテンツの開発が望まれる。

● **学習のために開発されている教材・教具の状況**
リソースとしての教材・教具の特徴を調べる。

● 「リソース・リテラシー」の教育

教師養成教育や教師研修の中にリソース・リテラシーの教育を盛り込み、指導する教師の教育をおこなう。

● リソースの教材化

漫画やゲームなど学習者に親しまれているリソースを教材として利用する。例えば、韓国の外国語高校用の日本語教科書である「日本語を読む」は、漫画

や写真が多用されている。

● 自動翻訳機の活用

日本語力の低い学習者がインターネット上のリソースにアクセスできるように、利用可能な自動翻訳機やリーディングソフトを把握し、併せて学習者の使用状況を調査する。

● リソースの効果的な提示方法に関する理論化

リソースの活用に関する研究は緒に付いたばかりであり、今後研究実績の積み重ねが必要である。

● 人的リソース活用の環境作り

海外における地域内日本人会と学習者との姉妹関係締結などを通じて交流を支援したり、インターネット画像会議の設備支援などをおこなって、人的交流の環境を整えることが求められる。

● リソース資料室の運営

教材資料室としてリソース・センターを運営し、リソースの活用性を高める。

● 著作権の問題

学習者に人気のあるリソースほど著作権上の問題が発生しやすい。著作権フリーのリソースが増えれば、リソース活用の拡大に直結する。

● 無料化のすすめ

学生は無料でないと近づかないのでリソースは無料であることが望まれる。

以上のように、学習者中心のリソース活用が求められている。学習者を活かすことは日本語教育を活かすことにつながる。開かれた日本語教育に向けてリソース・リテラシーの教育をすすめた。

(本内容は、2006年2月5日の国立国語研究所「学習手段と学習環境に関する調査報告のためのシンポジウム」にて発表した内容に基づいている。)

イトクボン／同徳女子大学校外国語学部日本語学科／大学院日語日文学科教授
db123jp@yahoo.co.jp

記録 たかはし かおる／お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科
takahashi_ocha@yahoo.co.jp